

京都大学ヒマラヤ研究ユニットの発足

湯本貴和

京都大学霊長類研究所

学際融合教育研究センターとユニット

2016年4月1日に、京都大学学際融合教育研究センターに「ヒマラヤ研究ユニット」が加わった。学際融合教育研究センターは、京都大学における複数の学問領域を横断する学際的な教育研究を機動的かつ柔軟に推進する実施体制の整備をおこなうべく、2010年3月9日に設置されたものである。

今、地球が抱えている問題は極めて甚大で、いずれも複合的にもかかわらず、それぞれの学問はあまりに細分化されており、隣の学問すら全然理解できないような状況である。このような現代の抱える課題に対して、総合大学としてどう対応するかが、京都大学にとっても大きな命題である。研究者にとっても専門外の知識が不可欠であり、大学としても部局を超えた対応が必須となっている。しかしながら、現在の大学組織体制は、一部局を超えた取り組みは準備や運営がスムーズに進まないジレンマを抱えている。そのため、全学的・部局横断的な取り組みに対して柔軟かつダイナミックに対応し、かつ挑戦的に諸学の「融合」を仕掛ける新組織として、京都大学は学際融合教育研究センターを設立した。その学際融合教育研究センターの傘下に、部局を超えた連携や融合による教育や研究を目的とした、時限付きのグループである「ユニット」を設置し、複数の部局による分野横断型の教育研究プロジェクトを推進している。平成28年4月現在で、33のユニットが学際融合教育研究センターに属しており、「ヒマラヤ学誌」を発刊している母体のひとつである霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院も、教員組織としては霊長類学・ワイルドライフサイエンスユニット（ユニット代表：松沢哲郎；ユニット副代表：湯本貴和）という形態をとっている。

ヒマラヤ研究ユニット

京都大学は「探検大学」と呼ばれるほど、世界各地で初登頂や初調査をおこなってきた。とくにヒマラヤ地域での学術登山活動は、他に類例がない。1955年の木原均・今西錦司らによるカラコルム踏査では、コムギの祖先種の発見があり、カラコルム4大氷河のトラバースという偉業を成し遂げた。翌1956年には京大学士山岳会 AACK が計画し日本山岳会に委譲したマナスル登山隊が、マナスル(8156m)の初登頂に成功し、京大農学部卒業生である今西壽雄が栄えある初登頂者になった¹⁾。ちなみに本年2016年はマナスル登頂60周年であり、国民の祝日「山の日」の発足にあたる。

続く1958年には、①今西錦司と伊谷純一郎のアフリカ初探検、②西堀栄三郎の南極初越冬、③桑原武夫のチョゴリザ初登頂という3つの大事業が成功した。その一方で、梅棹忠夫の文明の生態史観につながる東南アジア調査、川喜田二郎の西北ネパール、中尾佐助のブータンという若手研究者の個人調査が行われた。こうした一連の研究により、木原（遺伝学）、今西（霊長類学）、桑原（フランス文学）、梅棹（民族学）は、いずれも後年に文化勲章を受章している。

こうした野外研究の「京都学派」と呼べる学問の系譜があって、京都大学では理工医農だけでなく教育などの研究科での教育研究をはじめ、東南アジア研究所、霊長類研究所、アジア・アフリカ地域研究研究科、野生動物研究センターといった他大学にはないユニークな教育研究組織が誕生している。さらに1985年のブータン・マサコン峰初登頂（堀了平医学部教授）、チベット・ナムナニ峰初登頂を経て、1989年に京都大学ヒマラヤ研究会 ASH が組織された。1989～1990年には、ムズターグアタ峰とシシャバンマ峰に遠征隊（戸部隆吉医学部教授・病院長）を送って登頂に成功

するとともに、低酸素環境下の医学研究を推進した¹⁾。それらの成果報告の媒体である『ヒマラヤ学誌』は創設されてから、四半世紀が経過した。その成果に対して秩父宮記念学術賞が授与された。

このようなヒマラヤ学の輝かしい実績の数々は、さらに「フィールド医学」、「野生動物学」という、京都大学フィールド・サイエンスの新しい研究分野の創出につながっている。直近の活動としては、ヒマラヤの小国ブータンを対象に、「京大ブータン友好プログラム」を2010年10月から始めた。過去5年半、霊長類研究所が中心となって多数の部局の連携のもと、順調に成果を積み重ねてきた。派遣は15隊、のべ200余名の教職員学生がブータンに渡航した。また京大病院では総計78名の医師・看護師・職員をブータンに派遣している。この「京大ブータン友好プログラム」は、こういう機会でもなければブータンに渡航することなど思いもよらなかった教職員学生を巻き込み、「ブータンといえば京大、京大といえばブータン」という評価を確実なものとしている。

そこでプログラムを継続発展させて京大のユニット組織とし、活動を恒常的に支援して、「ヒマラヤという第3の極地」を対象にしたユニークな教育研究施設を設置することにした。ブータンだけでなく、西はカラコルムから東は雲南まで、「グレートヒマラヤ」がその研究対象である。第3の極地を対象に学術研究教育を展開する組織、それが「ヒマラヤ研究ユニット」(Unit for Himalayan Studies)である。ヒマラヤ研究は、学際研究にほかならない。「ヒマラヤ研究ユニット」の発足にあたっては、13部局から29名の京大教員を部局横断的に結集した。

向こう5年間の計画で、以下のことを実現していく。

1. 京大とブータン王立大学の大学間交流協定(2014年締結)をもとに、京大ブータン友好プログラムを継続発展させて、ブータン一国まるごと全体を対象とした教育研究を実施する。
2. グレートヒマラヤの他の地域でも同様な研究教育を展開する。次の目標として、雲南、チベット、カシミール、カラコルム等がある。これらは東南アジア(研究)という地域ではなく

れない、未知の未踏の領域だ。

3. 『ヒマラヤ学誌』の継続発行をもとに、京大の学術探検研究とフィールドワーク教育の求心力になる。これまでも氷河研究、フィールド医学などでバイオニアワークがあるが、さらに新しい学問の創生をめざす。
4. 京大の学術探検のデジタルアーカイブの作成に協力する。木原均・今西錦司の1955年のカラコルム以来60余年の伝統、京大学士山岳会1931年の創立以来85年の伝統があり、貴重な資料が整理を待っている。

ヒマラヤ研究ユニットの構成員

それぞれのユニットは、「ユニット申請書」を学際融合教育研究センター・運営委員会に提出し、審査を受ける必要がある。2016年1月末に、学際融合教育研究センター・中村佳正センター長あてに申請書類を提出した。上段のヒマラヤ研究ユニットの解説は、その申請書の記述に沿ったものである。

申請時のメンバーは以下のとおりである(敬称略、記載順は「ユニット申請書」にしたがう。所属・肩書は2016年1月当時)。

- | | |
|-------|--------------------------|
| 湯本貴和 | (霊長類研究所・教授・ユニット代表者) |
| 幸島司郎 | (野生動物研究センター・教授・ユニット副代表者) |
| 松沢哲郎 | (霊長類研究所・教授) |
| 高井正成 | (霊長類研究所・教授) |
| 川本 芳 | (霊長類研究所・准教授) |
| 早川卓史 | (霊長類研究所・特定助教) |
| 伊谷原一 | (野生動物研究センター・教授) |
| 平田 聡 | (野生動物研究センター・教授) |
| 山本真也 | (野生動物研究センター・特任准教授) |
| 松林公蔵 | (東南アジア研究所・教授) |
| 清水 展 | (東南アジア研究所・教授) |
| 安藤和雄 | (東南アジア研究所・准教授) |
| 藤澤道子 | (東南アジア研究所・連携准教授) |
| 奥宮清人 | (東南アジア研究所・連携准教授) |
| 坂本龍太 | (白眉プロジェクト・特定助教) |
| 吉川左紀子 | (こころの未来研究センター・教授) |
| 内田由紀子 | (こころの未来研究センター・特定准教授) |

熊谷誠慈（こころの未来研究センター・特定准教授）
中嶋智之（経済研究所・教授）
橋本 学（防災研究所・教授）
松岡雅雄（ウイルス研究所・教授）
深町加津枝（地球環境学堂・准教授）
竹田晋也（アジア・アフリカ地域研究研究科・教授）
中務真人（理学研究科・教授）
木村泰久（農学研究科・助教）
吹田啓一郎（工学研究科・教授）
西平 直（教育学研究科・教授）
明和政子（教育学研究科・教授）
杉本 均（教育学研究科・教授）

呼びかけに応じて、分野横断的に京都大学の13部局から29名の発足メンバーの参加が得られた。研究分野としては、生態学、動物行動学、比較認知科学、遺伝学、古生物学などの生物学分野を筆頭に、ウイルス学、フィールド医学、精神医学、認知科学、文化人類学、仏教学、マクロ経済学、地震学、ランドスケープ学、応用生物化学、建築学、臨床教育学、比較教育学など多岐にわたる。いずれもブータンをはじめとしてネパール、パキスタン・カラコルム、インド・ウッタラカンド（クマオン）およびアンナチャール、中国・チベットおよび雲南などのフィールドワークをおこなってきた研究者、あるいは京大ブータン友好プログラムで初めてブータンに行きつながりを得た研究者の面々である。また少なからずのメンバーは、総合地球環境学研究所プロジェクト「人の生老病死と高所環境：「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応」の共同研究者として、2006～2012年の間、ともにフィールドワークと議論を重ねてきた。

ブータン王立大学(RUB)一行京大訪問

ヒマラヤ研究ユニットが発足して3ヶ月後の7月11～14日、ブータン王立大学(RUB: Royal University of Bhutan)の使節団が京都大学を訪問するという、ユニットにとって重要な出来事があった。一行は、ニドゥップ・ドルジ（ブータン王立大学・総長）、アンドゥ・ドゥクパ（ブータン王立大学ジグメナムゲル工科カレッジ・学長）、

サンゲイ・ティンレイ（ブータン王立大学シェラブツェカレッジ、研究部長）、テンジン・ドルジ（ブータン王立大学言語文化研究所・研究部長）、ダン・バハドゥル・グルン（ブータン王立大学天然資源カレッジ・研究部長）、ケザン・シェラブ（ブータン王立大学教育パロ教育カレッジ・研究部長）、ウゲン・レンドゥップ（ブータン王立大学ゲドゥビジネス研究カレッジ・研究部長）、ツェテン・ドルジ（ブータン王立大学科学技術カレッジ・研究部長）、ソナム・リンチェン（ブータン王立大学サムチェビジネス研究カレッジ・研究部長）、ジャンバ・トブデン（ブータン王立大学国民総幸福研究所・主事）、ファンチュン（ブータン王立大学研究渉外部長）の11名である。

ブータン王立大学は、ブータン国内に分布している9の研究機関からなっている。ブータン王立大学については坂本龍太が詳しく解説している²⁾が、その後の制度改革で医学・薬学関係の研究所やカレッジはブータン王立医科大学として再編されている。今回は8つの研究機関から学長もしくは研究部長が代表として京都大学を訪問した。入国から帰国まで、一行に随行して応待にあたったのは、4月から東南アジア研究所准教授となり、今回をきっかけにユニットの事務局長をお引き受けいただいた坂本龍太・ヒマラヤ研究ユニット事務局長である。

使節一行の行程は以下のとおりであった。

7月10日

XJ610 14:15 バンコク（ドンムアン空港）発
21:40 関西国際空港

関西国際空港で坂本龍太・東南アジア研究所准教授が出迎えて、MK スカイゲイトシャトルでパレスサイドホテルへ

7月11日

10:00～11:00 時計台記念館第4会議室にて、全体スケジュールの説明

松沢哲郎・国際高等研究院副院長、坂本龍太・ヒマラヤ研究ユニット事務局長

11:00～12:00 時計台記念館迎賓室にて、山極壽一総長表敬訪問

RUB 御一行11名、日本側出席者：山極壽一・総長、湊長博・副学長（研究担当）、稲葉カヨ・副学長（国際担当）、森重文・国際高等研究院院長、松沢国際高等研究院副院長（京都大学

ブータン友好プログラム代表世話役)、幸島
司郎・野生動物研究センター長(ヒマラヤ研
究ユニット副ユニット長)、上本伸二・医学
研究科長、稲垣暢也・附属病院長、坂本ヒマ
ラヤ研究ユニット事務局長、松林公蔵・京都
大学ブータン友好プログラム副代表、松下和
夫・京都大学名誉教授

12:15 ~ 13:30 ラトゥールにて昼食

RUB 御一行 11 名、森国際高等研究院長、
松沢国際高等研究院副院長、松下京都大学名
誉教授、幸島野生動物研究センター長、坂本
ユニット事務局長

13:30 ~ 14:30 時計台記念館第 4 会議室にてブー
タン王立大学側との打ち合わせ

14:30 ~ 18:30 時計台記念館国際交流ホール I
にて

「国際シンポジウム：ブータンの自然と文化
のための学術の創発」

(2016 年はブータン・日本外交関係樹立 30
周年とされていますが、京都大学はこれより
前の 1957 年秋に第三代王妃を桑原武夫教授
らが接遇して以来の友好の歴史があり、来年
60 周年を迎えます。京都大学の基本理念で
ある「地球社会の調和ある共存」は、ブー
タン王国の理念とまさに一致します。本シン
ポジウムでは、ブータン王立大学からニドッ
プ・ドルジ総長ほか 11 名をお迎えして、京
都のバイオニアスピリッツ(初登頂の精神)
から育まれた友好を深め、未来へ向けた教育
研究機関のあり方を模索します。)

主催：京都大学ヒマラヤ研究ユニット、ブー
タン王立大学

後援：国際高等研究院、京都大学霊長類学・
ワイルドライフサイエンス・リーディング大
学院、京都大学ブータン友好プログラム、京
都大学学士山岳会、日本 GNH 学会

*ブータン王立大学から 2 時間、京都大学か
ら 2 時間の話題提供

18:30 ~ 20:30 カンフォラにて歓迎会

RUB 御一行 11 名と京大関係者など 43 名
の計 54 名

7 月 12 日

東南アジア研究所、地球環境学堂、経済研
究所、数理解析研究所、基礎物理学研究所を

訪問

7 月 13 日

午前：こころの未来研究センター(吉川左紀
子・センター長、熊谷誠慈・特定准教授、内
田由紀子・特定准教授)を訪問

午後：京都大学防災研究所(寶馨・所長、丸
山敬・教授、大見士朗・准教授)を訪問

夕方：招徳酒造を訪問

7 月 14 日

午前：京都水族館(野生動物研究センター)
見学

14:00 ~ 18:00 今後についてのワークショップ
(時計台記念館第 4 会議室)

終了後、そのまま MK スカイゲイトシャト
ルで関西国際空港へ

最終日 14 日の午後に開催された「今後につい
てのワークショップ」では、ブータン王立大学と
京都大学の今後の協力関係について、活発な議論
を交わした。1964 年に JICA の農業指導員として
派遣された西岡京治は、かつて中尾佐助が大阪府
立大学で指導した学生で、長年にわたってブー
タンの農業発展に尽力し、「ダショー」という尊号
が与えられた。西岡京治のようにブータンで尽く
すような人材を、とくに工学系の京都大学関係者
に求めたいというのがブータン側の要望であつ
た。また数々の訪問先で「よい教育は大学教員が
日々自ら研究することのなかでこそ生まれる」と
いう京都大学の研究大学としての姿勢が深く印象
に残ったようだ。さまざまな形での研究計画を
ブータン王立大学側と京都大学側で関心を共有す
る小さなグループで、双方の意見を入れてつくつ
ていきたいという希望も述べられた。まさにブー
タンでの一国アウトリーチをおこなう人材を育成
していくことが、京大に求められたわけである。

ヒマラヤ研究ユニットのこれから

こうして、ヒマラヤ研究ユニットは発足時に、
ブータン王立大学御一行を迎えるという、またと
ない機会を得て、広く京都大学執行部や研究所・
研究センターに一定の知名度を獲得することがで
きた。今後、ブータン王立大学との提携を深めて
ブータンの教育研究に関与するのをひとつの先例
として、インド、ネパール、中国と連携の輪を広

げていくとともに、ユニット内での情報交換を頻繁にして、分野横断的な活動を強めていかなくてはならない。手始めとしては、こころの未来研究センターの熊谷誠慈・特定准教授が主宰している「ブータン文化講座」などに関する情報を広報し、関心のある研究者や学生を結びつけていくボトムアップ的なアプローチをとりつつ、SATREPS や大型の科学研究費補助金を獲得すべくトップダウン的なアプローチにも取り組んでいきたいと考えている。『ヒマラヤ学誌』の読者もみなさまにも広くご支援をいただきたく、お願いする次第である。

引用文献

- 1) 松沢哲郎 (2016) 玄冬の AACK：京都大学の過去 100 年間の登山活動。『ヒマラヤ学誌』17:2-7.
- 2) 坂本龍太 (2013) ブータン王立大学御一行の京都大学訪問に寄せて。『ヒマラヤ学誌』14:195-206.

Summary

Launch of Unit for Himalayan Studies in Kyoto University

Takakazu Yumoto

Primate Research Institute, Kyoto University, Japan

Unit for Himalayan Studies, a new interdisciplinary group for education and research in Himalayan region was launched in April, 2016, under Center for the Promotion of Interdisciplinary Education and Research in Kyoto University. Twenty-nine faculty staffs out of 13 graduate schools, institutes and research centers in Kyoto University joined to the unit as founder members. The unit is based on long history of researches and friendships of Kyoto University in Himalayan countries, especially in Bhutan. The purpose of the unit is to promote interdisciplinary research and education on Great Himalayan regions across Pakistan, India, Nepal, Bhutan and China. The first remarkable event for Unit for Himalayan Studies was to accept honored guests from Royal University of Bhutan (RUB) to Kyoto University on 11-14 July, 2016. Eleven delegates from RUB visited Kyoto University to strengthen the relationships between RUB and Kyoto University. A plenary symposium was held in Clock Tower Hall on the first day, and the delegates visited several graduate schools, institutes and research centers in Kyoto University to discuss the ways of collaboration individually on the second and third days. On 14 July, the last day of their visit, we had a concluding meeting of the future cooperation between two universities to promise the further corresponding and planning. Unite for Himalayan Studies continues every effort to combine researchers, students and other members of Kyoto University who concern to Himalayan region, and to establish a platform for working together.

Keywords: Center for the Promotion of Interdisciplinary Education and Research, Great Himalayas, Kyoto University, Royal University of Bhutan